日吉台地下壕保存の会会報

第９８号

日吉台地下壕保存の会

第１４回戦争遺跡保存全国シンポジウム「沖縄県南風原大会」深まる論議　広がる運動　盛会裡に開催・終了

来年度は慶大日吉で全国大会

全国シンポジウム開会集会

敗戦から６５年、第１４回戦争遺跡保存全国シンポジウム沖縄県南風原大会は6月１９日（土）～２１日（月）まで３日間に渡り、本土より一足早い梅雨明けの沖縄県南風原町中央公民館ホールで開催されました。

沖縄はリゾートの地であるとともにアジア太平洋戦争の激戦地であり、かつ普天間をはじめとする米軍基地問題に揺れる島です。遥か南方、しかもこれまでの夏休み開催とは異なる条件のもとにも関わらず日吉台地下壕保存の会からは８名、神奈川県全体で１４名が参加し、シンポジウム、分科会に参加、また南風原文化センターホールで行われた懇親会では泡盛、ソーキに田芋リンガクなどの沖縄料理に舌鼓を打ちながら、「谷茶前」などの美しい琉球舞踊を観賞し、全国の保存団体の方々と交歓しました。

本土からは約８０名、全体で延べ４００余名の参加で戦争遺跡の保存と活用について熱い深まった討議が行われました。オプションとして全国に先駆けて町指定文化財として保存・公開された沖縄陸軍病院南風原壕と沖縄県内各所に分かれての戦跡見学会が行われました。

懇親会とネットワーク総会の中で来年度の全国大会は横浜市慶應大学日吉キャンパスで行われる旨紹介があり、会から亀岡敦子運営委員により全国の方々に来年度の開催についての決意表明と日吉での再会を希望する挨拶が行われました。来年度の全国大会開催に向けて今後周到な準備が必要となります。本会をあげて来年の全国大会開催に向けて着実に取り組んでいきましょう。

記

日時　2010年6月19日（土）～21日（月）
会場　沖縄県南風原町中央公民館ホール　南風原文化センターホール
主催　南風原町　戦争遺跡保存全国ネットワーク　沖縄平和ネットワーク　南風原平和ガイドの会

【大会】
《6月19日（土）第1日目》
9：00～12：00開会集会
実行委員長挨拶
　吉浜忍（南風原町文化財保護委員会）
南風原町長挨拶　城間俊安町長
シンポジウム
テーマ「戦争遺跡の保存・活用の現状と課題」
パネリスト　十菱駿武（全国ネット）
　　吉浜忍（沖縄）
　　大城和喜（南風原町）
　　北原高子（長野県松代）
　　愛沢伸雄（千葉県館山）
コディネーター
　　村上有慶（全国ネット）
13：00～16：30　分科会
　　第1分科会「戦争遺跡保存運動の現状と課題」
　　第2分科会「調査の方法と整備技術」
　　第3分科会「平和博物館と次世代への継承」
17：30～20：30　交流会

《6月20日（日）第2日目》
9：00～10：00　全国ネットワーク総会
10：30～15：00　分科会
15：30　閉会集会
17：00～18：30　オプション　沖縄陸軍病院南風原壕めぐり

《6月21日（月）第3日目》オプション　県内戦跡めぐり

6月14日～6月23日
南風原文化センター企画展
｛全国戦争遺跡写真展｝

語り継ぐ「人」重要

3分科会200人が確認

戦跡保存全国シンポ

第14回戦争遺跡保存全国シンポジウム南風原大会（南風原町、戦争遺跡保存全国ネットワークなど主催）の最終日は20日、同町中央公民館ホールなど2会場で三つの分科会が開かれ、約200人が参加した。戦跡の保存とともに、戦跡が持つ意味や歴史を正しく語り継ぐ「人」の重要性があらためて指摘された。

戦跡保存運動の強化を確認した閉会集会＝南風原町中央公民館

第1分科会

沖縄平和ネットワークの津多則光さんは「ヒトからモノへ」という大会テーマについて「誤解を招かないよう説明が必要。初日の会場には元ひめゆり学徒もいた。体験者が置き去りにされているという気持ちにならないか」と違和感を示し、「生存者の証言を聞き取る努力が先。戦跡を語るとき、人を登場させる視点は重要だ」と強調した。

第2分科会

県立埋蔵文化財センターの山本正昭さんは1998年度から2006年度まで行われた県戦争遺跡詳細分布調査について発表。「地域の人が地域の戦跡を知らない現状があり、調査の成果を地域に還元しないといけない」と課題を挙げた。

南風原文化センターの上地克哉さんは、沖縄陸軍病院南風原壕の整備工事や安全対策などを報告した。

第3分科会

太平洋戦争中、天皇や軍司令部の避難先として掘られた長野市の松代大本営跡を案内している平岡俊雄さん(68)。「長野の中高生が明治大学生田キャンパス内にある旧陸軍登戸研究所（川崎市）の保存運動に取り組む森田忠正さんは、地域の観光協会やマスコミ、行政などを巻き込んだ運動が実を結び、同研究所が資料館として一般公開された経緯を紹介した。

閉会集会

南風原壕でガイド活動に取り組む琉球大2年の福広太郎さん(19)が「平和のための戦争遺跡の保存と活用の運動を怠ることはできない」などとする大会アピールを読み上げ、採択された。

2日間にわたった分科会では計34本の報告があった。15回大会は来年8月、横浜市で開かれる。

沖縄への修学旅行の事前学習で訪れる場合が多く『沖縄戦は地下壕を掘る時間稼ぎに使われた』と関連付けて話すと静まりかえって聞いてくれる」と語った。

戦争遺跡保存全国ネットワークの村上有慶さんは「平和学習のため沖縄を訪れる人が年間50万人を超え、平和学習の観光化が進んでいる。証言者も戦跡も消耗するので、保存と公開（のバランス）を考えなければいけない」と指摘。明治大大学院生の石橋星志さんは「インターネット上でガイド同士の交流が日常的にできないか」と提言した。

沖縄タイムス 2010 年 6 月 21 日 28 面

報告

【第１分科会】

第１分科会では１１本の報告が行われたが、以下印象的であったいくつかの報告について取り上げたい。

⑩「２００９那覇市真嘉比（まかび）における遺骨収集事業について」

収集された遺骨

沖縄はアジア太平洋戦争時、米軍の上陸を受け、住民を巻き込み、激しい地上戦のあったところである。開催地「南風原町」はまさにその地であるが、第一分科会の報告の中にも沖縄の戦火の激しさを今にまざまざと伝えるものが数多くみられた。
この報告もその一つで、報告者の具志堅さんが那覇市の開発に伴う「緊急雇用創出事業」としてホームレスの人々を使った遺骨収集事業についての報告である。戦争の犠牲者の遺骨収集は厚生労働省の事業で国が今も継続して行っているものと思われがちであるが、沖縄には今も多数の遺骨が収集されずに埋まっていて、それが個人の善意によってようやく掘り出され、遺族を探し求める活動が細々と行われているのが現実である。しかも国や県としては遺骨収集事業は行っていない。フィリッピンなど外地ならいざ知らず沖縄は日本であり、しかも那覇市という県庁所在地の繁華街にほど近いところの話である。当然遺骨があると分かれば国家が責任をもって関わるべき事業であると思う。国家が行った戦争なのである。個人の善意にまかせていて良いのだろうか。米軍はベトナム戦争で亡くなった兵士の遺骨収集をベトナムで今も行っていると聞く。遺族はどこかに生きているので遺骨を返還しなければならない。それとも「大君の辺にこそ死なめ　かえりみはせじ」と歌わされたように「草生す屍（かばね）」となったことで戦死者にとって、それは本望なのだとして国家は頬かむりしているのだろうか。掘り出された 172 体（人）の遺骨の（人々の）中には「国を守る気概を持て」などと甘言美字麗句を並べ立てられ戦線に送りだされ、「お前の骨は拾ってやる」などと言われた人も多かろう。国は骨は拾ってくれていないのである。「あとは野となれ　山となれ」的戦争処理の実態の象徴のような報告であった。

収集された遺骨

収集された砲弾

分科会討議の中で大会の「ヒトからモノへ」というタイトルについて「遺骨はモノかヒトか」という問題提起があった。具志堅さんもひめゆり部隊の体験者（語り部、生き証人）たちがこのタイトルに違和感を持たれているという報告をされていた。考古学の分野では 100 年経たないと遺骨はモノにならないという話があるそうだ。現地、大道森の遺骨の中には炭化

した脳が頭蓋骨のなかにあるものが掘り出されている。戦後 65 年、65%はモノになっているが 35%はヒトなのだ。口はきけなくとも遺骨は多くのことを語る。ただこの「ヒトからモノへ」というタイトルは戦争の実態が平和の語り部であるヒトから語られ、さらにモノを通して次の世代のヒトへ平和への願いが継承されるという「ヒトからモノへ、モノからヒトへの平和への願いの増幅的継承」の意味だと理解されるべきと討議を通して考えた。

分科会での他の報告の中では、「街づくり」というキーワードで語られるものが目立った。④「横須賀市追浜地区におけるまちづくりと戦跡の保存活用」のように貝山地下壕（旧海軍航空技術廠）や第三海堡の緑地史跡公園化の取り組み②「京都１６師団輜重部隊の遺構を保存する取り組み」のように旧陸軍の師団門柱や歩哨舎遺構が大学の教育施設として保存される取り組み、⑤「日吉台地下壕の保存と活用」⑦「登戸研究所保存の会の活動と「明治大学平和教育登戸研究所資料館」の一般公開　戦争遺跡を地域の歴史遺産として保存・活用の課題」のように大学のキャンパスの中で教育環境の中の一つとして戦争遺跡を「負の遺産」ではなく正の遺産として積極的に活用しようという運動が増えてきていることが伺われる。単なる保存ではなく後世のための「保存・活用」というキーワードで保存運動が語られるようになってきていることも見逃せない事柄である。さらに⑨「戦争のための戦争遺跡・保存運動～満州戦跡保存会を中心に～」のように何のための「保存・活用」かという問いかけも印象に残った。戦前の「満州戦跡保存会」のように国威発揚のための保存運動もあり得、現代でも遊就館や呉のヤマト・ミュージアム、三笠記念艦などもその文脈に連なり、大きな影響力を持っている。こうした国威発揚、戦前の日本賛美的保存の在り方を克服し「再び戦争遺跡をつくらない、平和のために戦争遺跡の保存・活用を」という文脈での保存運動を高めていかなければならないと思う。

亀岡運営委員(第１分科会で発表)

ここ数年来第一分科会の司会など運営をさせていただいて思うことだが、はじめはここにこういう戦争遺跡があるよという「所在報告的発表」が目立ったが、それから「運動成果報告的発表」が増え、その中で「戦争遺跡の保存・活用」ということが言われるようになり、「街づくり」の中で「負の遺産」である戦争遺跡をどのように次世代へ「正の遺産」として継承していくかということが言われるようになってきた。雑駁なとらえ方だが、戦争遺跡はいつまでも隠ぺいすべき社会のお荷物ではない。原爆ドームと同じように平和のための街づくりの中で後世に残し、伝えていくことが私たちの課題であると認識するようになった。

（谷藤基夫記）

【第２分科会】

私は１日目は第１分科会に参加していたので第２分科会は２日目に参加しました。第２分科会のテーマは「調査の方法と整備技術」です。私が聞いた報告レポートは、

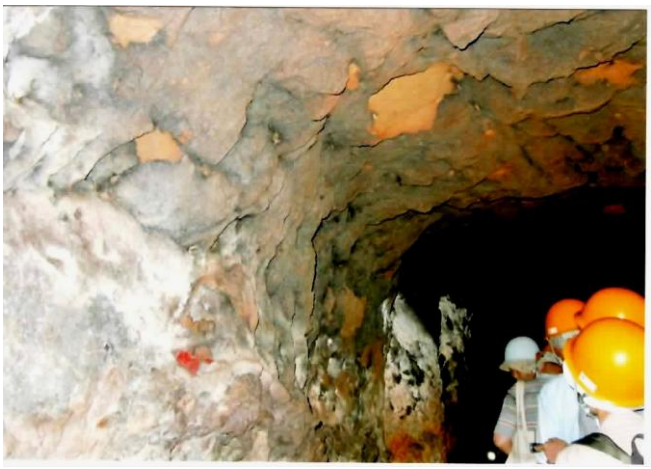
・「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査の成果概要」沖縄県立埋蔵文化財センター　山本正昭さん
・「沖永良部島へ - 不時着した特攻隊員を追って」　菊池実さん
・「西表島・船浮要塞跡の追加調査」　㈱島田組調査員　伊波直樹さん
・「沖縄陸軍病院壕南風原壕群 20 号壕の整備」　南風原文化センター　上地克哉さん
・「亀島山地下工場の戦跡考古学的調査について」　亀島山地下工場を語りつぐ会　村田秀石さん

・「占領・虐殺を経験した空間の再生可能性について」　京都大学大学院　高　誠晩さん

ですが、それぞれ自分の地元や持ち場に足をふまえた活動や研究調査の積み重ねがよくわかる力のこもった報告でした。私としては日吉の地下壕の調査・保存・活用に役立てるために、学ばせてもらいたいとおもい参加しました。その点で印象にのこったことを書きます。

韓国の趙誠倫さんと高誠晩さん

ひとつ目は保存と活用をいかに両立させるのかということです。陸軍病院南風原壕の整備工事をどのように考え実施したのかの報告はそのことをつよく考えさせられました。南風原の地下壕は地盤がよわく、素掘りの壁面がボロボロとくずれてしまいます。しかしここを「体験施設」として活用するためには安全確保と崩壊防止のためにかなりの補強工事をしたということです。これと比較して蟹ヶ谷通信隊地下壕は内部に大きな鉄骨を組み出入り口もふさいでしまって、活用ぬきの保存のみというやり方です。これでは平和を守るために戦争を学ぶ場として生かせません。



素掘りの壁面の南風原病院壕

南風原病院壕はその日の夕方、現地の方のガイドで見学しましたが、出入り口を二重扉にして内部崩壊を防ぎつつ見学できるようにしてあり、活用と保存を両立させるための努力と工夫が様々にされていました。南風原町の予算も相当使われています。また町としてガイド養成をしてこの戦争遺跡を大いに活用し、未来の平和のために過去の戦争に学ぶという姿勢を強く感じました。

ふたつ目は亀島山地下工場の調査研究です。岡山県倉敷市水島にあるこの地下工場は三菱重工業水島航空機製作所の疎開工場です。この地下壕は日吉の地下壕といろいろ共通点があります。①実際に戦時中に使われたこと、②機械工場なので工作機械据え付けのためのコンクリート台座や電気配線の跡が残されていること、③南北にのびた台地状の丘を東西につらぬくトンネルを何本も掘りそれをアミダ状につないでいて、日吉の艦政本部地下壕と似た形であることです。私は日吉地下壕の設備がどのようだったか、調べているので台座や配線に大いに興味をひかれました。亀島山の電気配線は碍子しか残っていないものの、工作機械用は 200V 3 相交流で３本線、電灯用は 100V 単相交流 2 本線でそれぞれ別配線になっていたそうです。

壁面崩壊防止をした南風原病院壕

亀島山地下工場を語りつぐ会では今回の大会を前に 136 ページの立派な調査研究報告書も作成し、ていねいな編集で参考資料としてとても勉強になります。

ところで3日目の戦争遺跡・基地めぐりのフィールドワークで聞いた話を紹介します。帰り道に嘉手納基地南のキャンプ桑江の海軍病院の横を通った時、ガイドの友利（ともり）さんは「この病院は老朽化していて建て替えないといけないのだけど、米軍はここを部分返還すると言ってきている。そして返還するから代替の病院をほかの場所に新築するように日本政府に要求しているんだ。アメリカは基地の『部分返還』と言って老朽施設を日本の税金で建て替えさせるんだ。」と教えてくれました。これはキタナイと私はおもいましたが、神奈川の米軍基地でも「部分返還」とひきかえに基地強化・施設拡充がすすめられています。だまされてはいけないとおもいました。

嘉手納基地(P3C 哨戒機)

（山田譲記）

【第3分科会】

第3分科会は、南風原文化センターホールを会場に行われた。報告が10本、うち複数の人が報告したものが3組あった。分科会のテーマは、「平和博物館と次世代への継承」という毎年のテーマに加え、沖縄開催ということもあり、サブテーマとして「ガイド活動を中心に」と掲げられ、各地のガイド実践が例年より多く報告された。報告者とタイトルは以下の通り。

19日、藤原政勝（南風原平和ガイドの会）「後世に語り継ぐ作業」前泊克美（ひめゆり平和祈念資料館）「ひめゆり平和祈念資料館の取り組み～次世代への継承」照屋盛行（沖縄市平和ガイドネットワーク）「沖縄県内の学校における平和教育の現状と課題」藤波潔・宜壽次翼（沖縄国際大学）「大学生による沖縄平和学習ガイドの一事例－沖縄国際大学「SmiLife」の活動－」池田恵美子（安房文化遺産フォーラム）「たてやま・地域まるごと博物館～“平和・交流・共生”の教育と地域づくり」。

20日、夏目勝弘（豊川海軍工廠跡地の保存をすすめる会）「豊川海軍工廠跡地（約6万坪）の平和公園化への取り組み」、平岡俊雄・塚田晴美（松代大本営の保存をすすめる会）「松代大本営跡のガイド養成のためのとりくみ」、石橋星志（明治大学大学院）「戦争遺跡と平和博物館を平和ガイドでつなぐ―研究・教育・継承を考える―」、瀬底言・平良翼ほか（壕プロジェクト）「壕プロジェクトの活動」、川満彰（沖縄平和ネットワーク）「やんばるへやってきた『御真影たち』～御真影奉護壕から見える戦前教育の末路～」。

語り継ぎの問題や、非体験世代のガイドについての報告が多かった。松代からは、ガイド状況や対処の様子を演劇風に見せたのは具体的で良かった。大学生世代からの報告もあったが、ガイド歴が短いのか、これまでの平和教育の問題を挙げつつも、自分たちは「ガイドを通してともに学ぶ」「高校生などの対象者と世代が近いことで伝わる」など、若さだけで、解決策でもなく、多分に自己満足の要素を感じた。また、自分の報告後はすぐに帰るなど、参加態度にも疑問を持った。

議論は司会の問いかけが多く、会場での議論の時間が少なかったことも残念だった。継承への実践面では、ひめゆりからの報告が最も切実で、だからこその積み重ねを感じる物であった。

沖縄開催ということで、大きな期待をしたが、沖縄においてもガイド実践の経験の共有は不十分で、また優れた実践もそう数は多くないように感じた。今後とも、戦争遺跡のガイドは、戦争遺跡を平和博物館的に活用できる大事な活動として位置付け、現状報告、課題の共有、それぞれの問題への対処法の共有などを継続的に行う場として、この分科会が機能するようにあって欲しいと思う。

(石橋星志記)

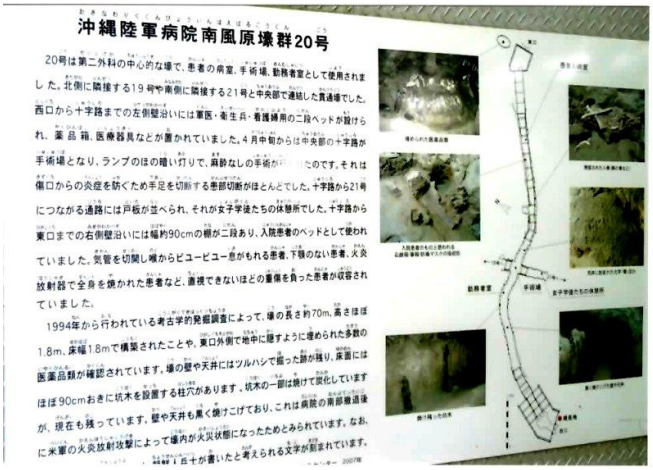
戦跡めぐり

陸軍病院南風原壕見学

鈴のように垂れさがる月桃の花

沖縄戦は昭和２０年４月の米軍上陸から６月２３日牛島司令長官自決の日まで激戦が続い、た。６月ごろには本土ではあまり見られない月桃の花がポツリポツリと沖縄の各地で咲いていく。砲弾の雨の中逃げ惑う住民たちの目にはバタバタと倒れていく命とこの時も咲いていただろう月桃の花の命とが強烈なコントラストを持って映ったに違いない。沖縄戦を描いた映画の題名にもなっている「月桃の花」、生姜の仲間だと言うが鈴のように垂れ下がる小さな白い可憐な花で、南風原陸軍病院地下壕見学のこの日に見ることができた。今は復興した家々の門柱の上にはシーサーが置かれているのが目につく。

家々の間を通って南風原平和ガイドの会の方々の案内で、全国に先駆けて戦争遺跡を町文化財に指定、保存、整備、公開された沖縄陸軍病院南風原壕２０号を見学する。沖縄のなだらかな丘陵の中腹にこの壕は存在する。６５年前のこのころ、今は平和なこの一帯は砲弾炸裂、大砲や機関銃の激しい音が耳をつんざく阿鼻叫喚の巷であった。地下壕の周辺は遊歩道もでき、平和の鐘や慰霊碑のある公園となっているが、当時は爆弾や機関銃の弾丸がころがり、泥だらけの歩きにくいところだったに違いない。地下壕の入り口には爆弾の破片が積まれ、こんな重いものが直撃すればひとたまりもないと思った。ヘルメットをつけ、懐中電灯を持って中に入る。壕の入り口には生理的食塩水やら薬品の瓶が積まれ、退避するとき、これらは運べなかったので、地下に埋められ、掘り出されたものだという。入り口近くの天井付近は火炎放射機で焼かれたものだというが、黒く炭化している。中の壁面に羹という韓国・朝鮮人らしい人の名のような字が彫られているところがあった。中は病院といっても、手足を切る（多分麻酔も使わず）手術ばかりが行われていたという。ベッドが置かれたような狭い空間もある。胸迫るものがあり、息苦しさを覚えて、いたたまれない気持ちになった。外に出てほっとして口数が多くなった。



陸軍病院南風原壕 20 号

陸軍病院南風原壕内展示

戦跡を巡りて思う今の幸　　（谷藤基夫記）

中部戦跡見学

〈コース〉　嘉数高台、白比川沿特攻艇秘匿壕群、北谷米軍上陸地、忠魂碑・奉安殿、美里「集団自決」跡地、ヌチシヌジガマ、石川収容所跡・宮森小学校ジェット機墜落地現場、

具志川グスク「集団自決」碑、中城湾沿いの銃眼、戦後引揚者上陸碑

南風原文化センター集合後、平和ガイドの方が運転し、かつ案内されるジャンボタクシーで廻る。沖縄本島中南部はなだらかな丘陵地とあとは平坦な地域の細長い島である。その中で嘉数高台は小高い丘で、そこに日本軍の陣地が構築された。この高台をめぐって日米両軍の激戦が繰り広げられた。一帯には日本軍のトーチカのあとや慰霊碑が点在する。高台の上に展望台があり、そこから北部方面には東シナ海や、米軍が上陸した北谷（ちゃたん）の海岸が遠望できる。そこから市街地になって、その間に問題の普天間飛行場が広がる。飛行場の周りはグルリ市街地、世界一危険な飛行場というのが一目でわかる。百聞は一見にしかずというのはまさにこれである。飛行場のすぐそばに沖縄国際大学があって、そこに米軍ヘリが墜落した際は、米軍はすぐに非常線を張り、日本の警察権すら及ばないようにしたという。横浜に米軍ジェット機が墜落した際もそうだったと言うが、「日米地位協定」という不平等条約をいつまで許しているのだろうか。時々米軍機の爆音が聞こえる。

嘉数高台から白比川という川の湾口部に行く。洞窟の入口が川に沿っていくつか並び、草いきれの中に埋もれる。特攻艇「震洋」という名だけ勇ましいが、木造のモーターボートであり、それに爆弾を積んで沖合の米軍艦船に本当に突っ込んだのだ。なんと無謀な・・・17艇あったというが、こんなところに潜んで、夜陰に乗じて必死の攻撃を懸ける。夏草に覆われた現場に行ってみれば特攻というものが、「作戦」ともいえない、自殺行為以外の何物でもないことがよくわかる。特攻に追いやられた人々は国家による殺人の犠牲者であると思う。

北谷の米軍上陸地は北谷海岸部のアメリカ村の海に面した所に碑が立つ。あたり一帯に米軍人家族の住むマンションが林立し、合間に黄色いＹ字マークの付いたナンバープレートの車が何台も駐車している。「思いやり予算」などによる様々な特権が与えられているのだというが、国家財政が潤沢な時ならいざ知らず、なんと不可思議な現象だろうかと思うばかりだった。

北谷から沖縄自動車道を北上、石川市へ、石川市美里小米軍ジェット機墜落現場に行く。復帰前であまり本土では報道されなかったように思うのだが、小学校の校舎に米軍のジェット機が墜落し、数十人の小学生が亡くなった。その小学校の校舎のすぐそばの慰霊碑に手を合わせる。その上空をジェット機の爆音が今も飛び交う。いつまで沖縄の人たちに重すぎる負担をかけていくのだろうか。どこかの本土の知事が「日本の安全のためには沖縄の人たちに我慢をしてもらっていればよいのだ」と言ったとか。本土を守るために沖縄を捨て石にした、かっての大本営参謀のような思考が今も本土には生きている。

牧志公設市場で食べる沖縄料理は絶品。本土では絶対に味わえない味覚である。国際通りは若い人たちで一杯。モノレール、自動車道、都市のビル林立と沖縄も開発は進んでいる。珊瑚とジュゴン、美（ちゅ）らの国として、リゾートの地としてだけ、沖縄が進んでいければよいのだが、そうするには沖縄の歴史と現状はあまりにも重い。

美（ちゅ）らの国　鉄の暴風　土の下　（谷藤基夫記）

ふたつの戦跡巡り、そしてふたりの平和ガイド

亀岡敦子

6月18日正午、2時間半の空の旅を終えた神奈川からの参加者7人は、梅雨明けの那覇空港に到着した。そこには平和ガイドの赤嶺さんが、ジャンボタクシーとともに待っていてくれた。昼食の時間も惜しいので、車中でおにぎりを食べながらの戦跡めぐりがはじまった。まず「海軍司令部壕」へ行き、狭い迷路のような壕内を歩く。壁には説明文や写真が掛け

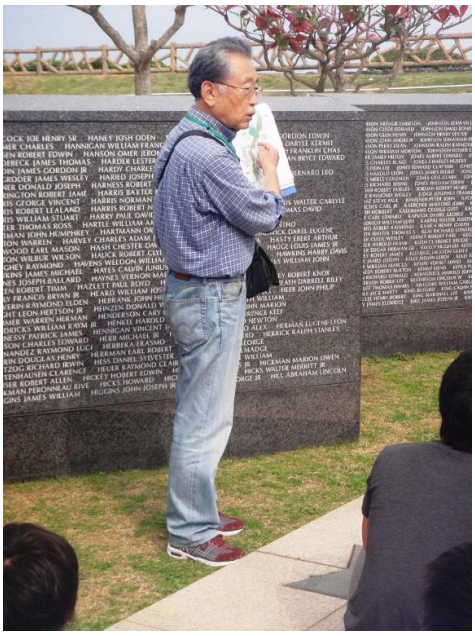
平和の礎

てあり、息苦しいほどの暑さの中、じっとりと濡れた壁を手で触ると、この壕のもつ罪と憤りと悲しみが迫ってきた。ここは日吉の地下壕とつながっているのだ。
次に平和祈念公園に移動し、摩文仁の丘に広がる明るい芝生と、沖縄戦で亡くなった約２４万人の名の刻まれた「平和の礎」の数に圧倒された。沖縄住民は市町村別に、県外出身者は各県ごとにその名が刻まれている。外国人は国別だ。私は、長年追い続けている塾生上原良司の名を長野県で、軍医だった大叔父の名を徳島県で見つけた。「ああ、やっぱり」、会ったこともない２人の死が急に身近に感じられた。

ガイドの赤嶺さん(感謝)

赤嶺さんは、巧みな運転とさらに巧みな語り口で、運転席のマイクを通して沖縄の歴史、文化、動植物について説明してくれた。終戦直後、放置されたままの３万５千人の遺骨の上に建てられた「魂魄の塔」と、追い詰められたひめゆり隊 10 名が自決した「荒崎海岸」の２箇所は、なんとしても訪れて欲しかった、と赤嶺さんは言った。荒崎海岸はつらかった。なんの標識もないサトウキビ畑の道を、車は進み、後はジャングルのように樹木の絡まった細道を海まで歩いた。ちょうど６５年前のこのころ、彼女達も同じ道を歩いたはずだ。摩文仁の丘でも、荒崎海岸でも地元の中学生が先生の説明に聞き入る姿が印象に残った。

最後に、ひめゆり平和祈念資料館に行き、ゆっくりと展示を見た。なかでも壁一面に掲げられた乙女達の写真は、みな凛とした美しい表情をしていて、胸が痛くなる。生存者の証言が映像で流されていたが、静かな話し方は、声高にこぶしを振り上げるよりも、心に響くものだ。若い学芸員と話し合えたのも、大きな収穫だった。


ガイドの大島さん

そして最終日２１日は、退職後沖縄に移り住み、平和ガイドとして活動している大島さんによる「住民の避難と碑文」を中心としたフィールドワークだ。まず、普天間基地を望む嘉数高台公園展望台で、沖縄戦についてのレクチャーがあった。それから地上戦に巻き込まれた住民が、追い詰められ命を落としたその場所を辿る。そこここに慰霊の碑があり、それぞれの建立目的や、更には表からは見えない意図をも、説き起こしてくれた。「魂魄の塔」と「平和の礎」では、圧倒されるような迫力で語った。お父上が香川県の戦死者のひとりとして刻まれているのだ。じっとしていても汗があごから滴り落ち、刺すような太陽のなか、帽子も被らず語り続ける大島さんの姿は、知識の深さと、独自に作った資料の豊富さとともに、沖縄のガイドの真髄とも言えよう。県ごとの慰霊碑の麗々しく空々しいことも、碑文は注意深く読まなければならないことも、妥協を許さぬ大島さんの説明でよく分かった。

私達は、ふたつの充実した戦跡めぐりを、ふたりの個性的な平和ガイドの案内で行うことができた。赤嶺さんのジャンボタクシーは、大会の２日間、会場までの送り迎えに大活躍だったし、おすすめの公設市場の食堂は、安くて美味しくて満足だった。沖縄大会は、その内容は重くつらかったけれど、南国の空と、哀しみを抱えているからこその優しさが、心の奥に残った楽しい旅行でもあった。

三田史学会「日吉台地下壕シンポジウム」開催！
～日吉台地下壕の学術的価値確認される！！～

今年度の慶應義塾大学三田史学会は戦後 65 年たって初めてキャンパスの中の戦争遺跡「日吉台地下壕」について取り上げ、三田史学会として画期的なシンポジウムが行われました。2010 年 6 月 26 日（土）午後 1 時から行われたシンポジウムは慶應大学三田キャンパス西校舎大教室ほぼ一杯 270 名近くの参加者で埋まり、その持つ学術的価値への関心の高さを表していました。

三田史学会(慶應義塾大学三田校舎)

シンポジウムには本会から新井揆博副会長が「日吉台地下壕保存の会の活動」と題して報告され、また十菱駿武戦争遺跡保存全国ネットワーク代表が「戦争遺跡研究の現状と課題」について報告されました。慶應義塾大学からは安藤広道文学部准教授が昨年４月行われた「軍令部第三部等地下壕出入り口の発掘調査成果」について報告されました。またコメントとして中国、ドイツの戦争遺跡の状況を一谷和郎中部大学人文学部教授「中国における日中戦争遺跡」「ベルリンの地下壕―特に総統地下壕を中心に―」神田順司慶應大学文学部教授二つのコメントの後に慶應義塾福澤研究センターの都倉武之氏が「アジア太平洋戦争と慶應義塾」と題して、大学史の中で「戦争期をまたいで存在するキャンパスそのものに加え日吉台地下壕という戦争遺跡を期せずして抱えていることを有効に活かし、近代日本史上の大学、または戦争について考える契機を積極的に模索していくべきである」とまとめられました。

２０１０年度三田史学会大会シンポジウム
キャンパスの中の戦争遺跡
研究・教育資源としての日吉台地下壕プログラム
報告１「軍令部第三部等地下壕出入り口の発掘調査成果」安藤広道文学部准教授
報告２「日吉台地下壕保存の会の活動」新井揆博副会長
報告３「戦争遺跡研究の現状と課題」十菱駿武戦争遺跡保存全国ネットワーク代表
コメント
１．「中国における日中戦争遺跡」一谷和郎中部大学人文学部教授
２．「ベルリンの地下壕－特に総統地下壕を中心に－」神田順司慶應大学文学部教授
３．「アジア・太平洋戦争と慶應義塾」都倉武之氏　慶應義塾福澤研究センター

報告２
「日吉台地下壕保存の会の活動」

日吉台地下壕保存の会　新　井　揆　博

１　日吉台地下壕保存の会発足

慶應日吉キャンパスの地下に巨大地下壕があることは、戦後、早くから一部教職員に知られていたが、戦後 40 年間本格的な調査をすることはなかった。この間、慶應高校の地底研究部がこの地下壕の調査研究を行い、報告集「わが足の下」（1969 年）にまとめている。学内教職員有志の調査や聞き取りが行われたのは１９８５年からで、この調査の過程で、こ

の地下壕が歴史的・土木工学的に重要な施設であることがわかってきた。そこで、慶應義塾教職員と地域住民が一緒になって貴重な地下壕を保存するために、1989年4月8日、「連合艦隊日吉台地下壕の保存をすすめる会」（略称:日吉台地下壕を保存する会）を発足させた。

当時の会則によると、第二条に会の目的を次のように示している。

1、日吉台地下壕を平和記念の史跡として保存するための運動をすすめる。
2、日吉台地下壕に関する調査、研究を進める。
3、日吉台地下壕を史跡として保存する意義を市民に広め､永く後世に語り伝えられるようにする。
4、日吉台地下壕の保存と共に、戦争と平和の問題を考え、学習できる「平和資料館」（仮称）を建設する運動をすすめる。

新井揆博副会長

と示している。 アジア太平洋戦争敗戦から６５年たち、戦争の語り部である直接戦争体験者が年々少なくなるなかで、慶應義塾日吉キャンパスをはじめとする戦争遺跡は「戦争の実相を知る」貴重な存在であり、①歴史研究の資料、②歴史教育･生涯学習の教材、③平和学習の物証･平和の語り部である。本会では、主として歴史･平和学習を深めながら、「平和の語り部」として、その活動を展開してきた。これからも、日本の国が二度と戦争をしないため、日吉の戦争遺跡を「平和の砦」として会員相互の連携を強め着実な活動を進めていく。

２　日吉台地下壕保存の会の組織

会員数　３４０名　９団体（2010 年 5 月現在)。　定期総会年１回、運営委員会１０回。
会報発行６回（９２号・特集号・９３号・９４号・９５号・９６号)。
２０１０年度予算１,２０３,０７８円（会費･見学会資料代収入など)。
会員個人年会費１口１０００円（高校生以下 500 円）・団体１口２０００円。

３ 年間２８００人に近い見学者が訪れる

２００１年、慶應義塾は連合艦隊司令部地下壕の整備を行なった。閉鎖していた蝮谷側の入口一箇所を開け、５０年間地下壕内に溜まった土砂を取り除き、ランタン型照明５０個を設置して壕内の安全を確保した。これによって慶應義塾の管理を明確にして安全な見学ができるようになった。

地下壕見学会　６３回（２００９年５月２３日～２０１０年５月２８日）
参加者　２７５８名（内小中高大学生　約１０００名）

１）　学校生徒の見学とそのねらい（２００９年９月～１２月）

９月１７日　横浜市立港北区日吉台小学校６年生･教員　　１２６名
日吉のまちの歴史を探り、戦争について学習しようとする意欲をもたせる。

１０月２９日　神奈川県立大師高等学校１年生･教員　　１１名
単元「人権･環境･平和･福祉」の中で地下壕見学を通して平和を考え、地下壕保存に取り組んでいる人たちとの交流を通して、自分の役割や出来ることを考える。

１１月１９日　横浜市立港北区新羽小学校６年生・教員　　４１名
戦争遺跡を見学させていただき、戦争や平和について考える学習を取り組んで行きたい。

１１月２７日　川崎市立中原区西中原中学校　　９名
教科書の中の出来事で終わらせるのではなく、実際に説明を聞き、その場に行くことにより、世界大戦について正しく歴史的事実を捉える。また、これからの世の中を作っていく１人として自分自身がどう考え、行動をとっていくか考えるきっかけにする。

１２月１０日　横浜市立港北区矢上小学校６年生･教員　　１０８名

社会科の戦争学習の中で戦争史跡として扱いたいので。

１２月１７日　横浜市立港北区日吉南小学校６年生・教員　　８０名

自分たちの住む街にある日吉台地下壕を見学することで、戦争の原因と拡大、その経緯を調べ、横浜での戦争の様子や人々の暮らしについて理解する。

日吉台地下壕を見学することで、戦争の様子やそこで働いていた人たちの気持ちを感じ当時の人々の願いについて考える。

戦争の悲惨さや愚かさについて様々な人々の立場に立って考え、自分たちの生活の歴史的背景に興味を持つ。

１２月２１日　横浜市立港北区駒林小学校６年生･教員　　９４名

歴史学習の一環として戦争遺跡を見学することにより学習内容の深化を図る。

１２月２４日　私立洗足学園高等学校１年生･教員　　１３名

３年前から毎年１２月に貴校の構内及び日吉地下壕内で実施しているもので、大学のミニ･キャンパスツアーを兼ねつつ、昨年来の平和学習の一環として、周囲に戦争関連の遺跡の多い本校と溝口、その周辺地域への理解を深めることを目指しております。

２）教育実践報告「子どもたちと戦争を結ぶ日吉台地下壕」

横浜市立下田小学校　山本浩二郎

ａ）教師の考え

イラク戦争の話題がニュースや新聞で数多く流れ、戦争について改めて考えさせられた昨年２００３年、６年生の子どもたちにとっても戦争への関心は高かった。「戦争はいけない」「人々がかわいそう」など戦争の悲惨さを思う子どもたち。しかしニュースや新聞から得られる情報は遠くの国で行われていることのおもいもじぶんのなかからわき上がった切実なものとは少々かけ離れているように感じていた。

実際私も始めての６年生の担任で、初めての歴史教育を試行錯誤の中ですすめていた。そして１５年戦争の学習、平和教育について学習していく時、日吉台地下壕を中心に学習を展開していくことで、子どもたちの中に戦争を自分により身近なものとして捉えることができた。私自身港北区社会科研究会をして地下壕を３回見学していたが、教材として学習していくのは初めてであった。そこで３年前の直井先生の実践を参考に、子どもたちと同じ立場で戦争の学習を進め、考えを深めていった。

ｂ）子どもたちの様子

まず「戦争について」知っていることや思うことを子どもたち同士で話し合った。おじいちゃん、おばあちゃんの戦争体験の話や原爆ドームに行ったこと、防空壕のことなど、様々な話しが出ていたが、日吉台地下壕について、知っている児童もいた。「地下壕って防空壕のことなの？」と思った子どももたくさんいて、自分たちの生活圏に大きな戦争遺跡のあることの驚きは、直ぐに見学してみたいと言う関心･意欲の高まりにつながっていった。

実際に見学してみて、まずはその大きさにびっくりした児童が多く、そして「どうやってつくったのか」「なぜつくったのか」「どのように使っていたのか」などのたくさんの疑問へと広がっていった。その後ビデオ（地下壕の様子が児童にも分かりやすかった）や資料による調べ学習をして、自分たちの疑問を解決していった。その中で「なぜ今でも地下壕を残しているのだろう」という疑問が子どもたちの中に強く残り、学習のまとめとしてみんなで自分の考えを発表し合うことにした。一人一人真剣な考えを持つことが出来、「戦争の怖さ、悲惨さを今後に伝えていくためだ」「戦争を二度と起こさないための象徴としてのこしている。」という意見が飛び交い、「戦争は本当にいけない」「平和な世界になってほしい」と強く思うに至った。この実践を通し、子どもたちが戦争を過去の出来事として見るのではなく、身近なこととして捉えていたように思われる。

ｃ）子どもたちの感想から

（見学を終えてのおもな感想･疑問）

・だれが、どうやって、つくったのだろう。
・日吉にこんな大きな地下壕があってびっくりした。今でもこうやって残っていてすごいとおもう。
・地下に大きな施設を造るということから、当時の戦争の激しさが分かる。
・どんなふうに使っていたのだろう。
・もし今戦争が起きたら、この地下壕を使うことになるだろうか。
・今は役に立たないけど、なぜ今でも残しているのだろうか。

(実践後のおもな感想)

・戦争について勉強して戦争はいけないことだと強く感じました。今世界では戦争が起きているところがあるけれども、早く平和な世界になってほしいと思います。
・日吉台地下壕を見学して、こんなに近いところで戦争があったなんてびっくりしました。地下壕のことを調べていくうちに、地下壕を作るのにたくさんの人が働いていたこと、ここから司令が出ていたことなど、戦争の激しさが分かりました。地下壕は日吉で戦争が起きていた象徴だと思います。戦争は本当に悲しいものだと思います。

ｄ）実践を終えて

この実践を通して、子どもたちの学習の高まりを感じながら学習を進めることが出来た。戦争の悲惨さを感じ、二度と起こしてはいけないと強く感じたようだ。そして現在に残る地域の戦争遺跡を学習し、その意義を考えたり、日吉台地下壕を大切に保存し、子どもたちに伝えてくださった保存の会の方々の活動にふれることができたことは、６年生の子どもたちには意義深かったと思う。

下田小学校では３年前から日吉台地下壕の見学を行っていて、戦争学習の教材として根付きつつある。また港北区社会科研究会では、初任者研修や区内巡検で見学を行っており、日吉台地下壕についての認識も広がり、数校が６年生の社会科見学で訪れている。日吉台地下壕は、戦争と現在の子どもたちを結びつけてくれる他の地域にはない大きな存在だと思う。下田小が地下壕を中心に学習できるのは、下田小の特色であり、財産であり、大変幸せなことです。地下壕保存の会の方々、本当にありがとうございました。

（上記の「教育実践報告」は、本会「会報　第 72 号」(2004 年 9 月 21 日）より転載したものです)

４　地域に根ざす「平和のための戦争展」･･･300 人参加

第 17 回「 川崎･横浜　平和のための戦争展」(川崎市平和館　１２月５日～６日）
共催　日吉台地下壕保存の会、蟹ヶ谷地下壕保存の会、陸軍登戸研究所を保存する市民の会
テーマ　―　私の街から戦争が見える　―　＜　戦争遺跡を地域の文化財に　＞
シンポジウム　「戦争遺跡をいかす平和ミュージアム」
中央大学名誉教授　姫田光義、　明治大学教授　山田　朗、
本会副会長　新井揆博
若者の発表　「平和とは何か？~ハト（鳩）からハートへ~」
専修大学高等学校生徒による
展示　登戸研究所･蟹ヶ谷地下壕･日吉台地下壕･市民が描いた戦争の記憶（絵画）
小池汪写真展
文化行事　参加者全員で歌う（くちびるに歌を　心に平和を）
プレイベント　日吉台地下壕見学・調布飛行場掩体壕・ハンセン病資料館等見学

５　戦争遺跡保存全国ネットワークの輪のなかで

1997 年 7 月、第 1 回全国戦争遺跡保存ネットワークの結成大会が長野市松代で行われ、呼びかけ団体のひとつとして本会も参加した。以来、全国の会員の皆さんから励ましを受けながら１４年、今日全国ネットワークは、団体 50・個人参加 188 名が加盟するまでにいたった（2010 年 6 月現在)。この間、調査・研究・出版活動を進めるとともに、毎年全国シンポジウムを開催してきた。今年は第 14 回目にあたり沖縄南風原で開催した。来年は 8 月、慶應

義塾日吉キャンパスで戦争遺跡保存全国シンポジウムの開催を考えている。

戦跡保存全国ネットワークの調査では、2010 年６月現在、指定・登録された戦争文化財は１７１件（前年度比１４件増）国指定文化財１７件、県指定１１件、市区町村指定７４件、国登録文化財５２件、市区町村登録文化財１１件、道遺産･市民文化資産３件に達している。

６　本会の調査研究･出版活動

１）調査研究

日吉台地下壕保存の会では、慶應日吉キャンパスに存在する戦争遺跡に、戦時中関わっていた元軍人や関係者から聞き取り調査や学習などを進めてきた。2002 年から 3 年間は、慶應義塾大学超表象デジタル研究センターのもと、慶應義塾学術フロンティア（学内研究団体）と共同して、研究テーマ「空間と人間―キャンパス･フエアにおける適応･生態･表現･デザインの分析と展開」に研究参加、日吉台地下壕保存の会の活動（テーマ「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」）を整理して、学術フロンティア推進事業研究成果報告書『表象文化に関する融合研究』第４巻「融合研究」に報告掲載した（平成１７年３月）。

慶應義塾創立 150 年記念企画「日吉の過去･現在･未来」の展示部門と講演会「日吉台地の成り立ちと先史時代以降の土地利用の変遷」に参加発表（2008 年 11 月 14 日（金）･15 日（土））。終了後、日吉台地下壕を見学案内する。

２）本会最近の出版物

『戦争遺跡を歩く　日吉』2010 年 5 版改訂　5000 冊増刷　地下壕見学者に配布

この本は、横浜市港北区の学校長会で（2006 年 2 月 9 日・16 日）、港北区小中学校の副教材に使用してもらえるよう了解を得て、以後、見学校には見学者全員に無償で配布している。

『日吉･帝国海軍大地下壕』2007 年 2 刷　近々改訂増補版作成予定

その他会員による著書多数。

７　これからの活動を進めるにあたって（2010 年度方針）

○『日吉平和ミュージアム』の建設にむけて努力する。
○戦争遺跡の史跡指定の早期実現を文化庁に働きかける。
○日吉台地下壕見学会の内容を充実させる。
○充実した小･中･高校生のための見学会を開催していく。
○『ガイド養成講座』を充実させ、ガイドの輪を広げていく。
○日吉台地下壕の学術調査･研究及び学習会を開催する。
○慶應義塾･横浜市･県･国への働きかけを、港北区住民の方を始めとする地域の方々と連帯して行う。
○全国の戦争遺跡保存運動の会との連携を深め、保存運動を盛り上げていく。
○運営委員会の活動の充実と拡大強化を図る。

最後に、この場を借りまして、私たちのこれまでの活動の成果が実り、2005 年 10 月、神奈川新聞社から第１８回神奈川地域社会事業賞を受賞した事を報告しておきます。(以上)

☆資料　　日吉にある戦争遺跡

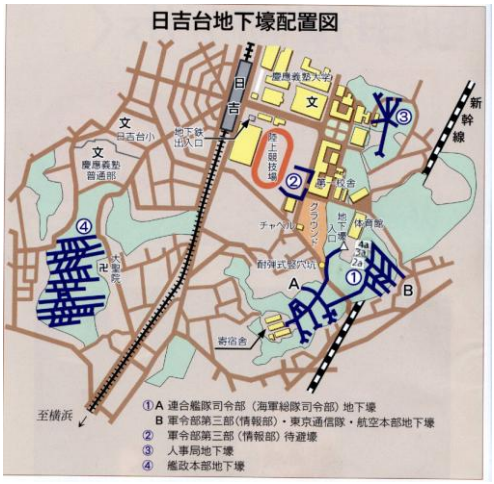
１）大学の「学び舎」が海軍中枢の軍事施設になった

第一校舎・寄宿舎（浴場共）・柔剣道弓術空手及卓球道場・赤屋根食堂・体育専用室・学生文化団体（専用室）・教会堂など５万坪のキャンパス（海軍省と貸借契約部分）。

２）海軍は 5000ｍの地下壕を築造

①Ａ　連合艦隊司令部（海軍総隊司令部）地下壕
①Ｂ　軍令部第三部（情報部）・東京通信隊・航空本部地下壕

②　軍令部第三部（情報部）待避壕
③　人事局・経理局地下壕
④　艦政本部地下壕



３）海軍は農家から土地の強制収用・屋敷の強制移動
４）５００名の予科塾生が陸上競技場から「学徒出陣」
（慶應義塾全体で３０００名～３３００名）
アジア太平洋戦争敗戦までに戦没した塾生や卒業生・教職員は２２２５名
５）日吉のまちは空襲にさらされる
日吉台国民学校…学区のお寺に学童疎開・人事局功績調査部の接収・そして空襲
日吉地区を襲った主な空襲…1945 年 4 月 4 日、4 月 15 日～16 日、5 月 24 日宮前地区　31 軒中 25 軒焼失。箕輪地区約 50 軒中 25 軒焼失。大門地区 20 軒中 18 軒焼失。慶應義塾大学工学部建物の 80%焼失。

コメント３

アジア･太平洋戦争と慶應義塾

慶應義塾福澤研究センター　都倉武之

１．趣旨

戦時下（ここでは主に 1937 年の日中戦争以降、太平洋戦争終結に至る期間）、とりわけ太平洋戦争期の慶應義塾（一貫教育校・諸学校の総称）に関する研究は、慶應義塾内においてさえ必ずしも十分な注意を払われていない。

そもそも大学史研究は､独自の組織と文化を対象にするものであり､関心が限定的で､視点も閉鎖的になりがちであり､学界で十分な批判を受けずに､一度活字になったものが再生産されることの多い分野である｡福澤という非常に個性の強い創立者と特色ある建学の精神の下に歴史を重ねた慶應義塾もその点は同様であると思われる｡以下では、現在の研究状況と課題の概略を報告したい。

都倉武之氏

２．研究の視点

（1）慶應義塾史編纂

・基礎的情報整理、記述　…『慶應義塾百年史』全 6 巻（1958-1969 年）*1
→大学による本格的年史編纂の先駆、体験当事者による編纂
→その後の研究の停滞、福澤研究の隆盛、白井厚研究会の尽力による補完*2
・福澤諭吉研究への傾斜

（2）福澤諭吉論の転回

・戦時下の福澤批判と福澤擁護
→自由主義・功利主義への批判と国権主義者としての擁護
→福澤著作の検閲、発行自粛*3
cf.「個人主義者たることに於てまさに国家主義者」（丸山真男）*4
・福澤研究への戦争の影響
→国権論の強調から戦後のアジア侵略者論へ

（3）塾長小泉信三の評価　（塾長在任 1933～46 年）

・福澤諭吉の思想と慶應義塾の維持への強い自覚

→「塾長訓示」（1940 年）、徳富蘇峰との論争（1944 年）*5

・戦時下の言動や行動への評価

→塾長としての抵抗と戦争協力

→塾生・塾員（卒業生）からの強い信頼

→塾長退任問題および戦後の東宮御教育参与就任

（4）塾生、塾員（卒業生）研究

・個別研究・戦没者研究

→戦没者調査・学生意識調査（白井ゼミ）

→上原良司、学生団体、最後の早慶戦、疎開学園、自分史　等*6

（5）日吉台地下壕

・構築と使用、戦争指揮、また米軍接収期*7

・慶應義塾史との関係*8

３．問題点と展望

（1）資料収集の必要性

・物資不足、保存状態の悪さ、戦災による亡失の三重苦

・収集の困難（戦没者遺族・体験者の高齢化・世代交替）

→白井厚研究会による調査研究蓄積

→福澤研究センター所蔵　義塾内移管資料*9、小泉資料、塾生資料収集*10

（2）評価の困難

・思想的評価の介在

・人間関係等の影響、資料使用・公開の限界

・オーラルヒストリーの扱い

（3）学術研究の深化の必要

・大学間、分野間（ex. 軍事史、生活史、民衆史…）の情報交流

・資料発掘、公開の促進

（4）教育方法の模索

・教育資源としてのキャンパス（土地）、校舎、地下壕

・どう形に残していくか

・解釈、評価をどう付与していくか

４．おわりに

慶應義塾において、福澤諭吉没後の学校史研究が極めて手薄である現状に鑑み、義塾の独自の文化や思想を十分見据え、過大評価にも注意しながら、近代史上の慶應義塾の位置や役割、またその限界をも論じていく環境を一層はぐくんでいくことが重要と考える。また、戦争期をまたいで存在するキャンパスそのものに加え、日吉台地下壕という戦争遺跡を期せずして抱えていることを有効に活かし、近代日本史上の大学、また戦争について考える契機を積極的に模索していくべきではなかろうか。

*1 慶應義塾の年史編纂には、福澤執筆による 25 年史にあたる『慶應義塾紀事』(1883 年)から始まり、『慶應義塾五十年史』(1907 年)、『慶應義塾七十五年史』(1934 年)、『創立百二十五年慶應義塾年表』(1985 年)、『慶應義塾史事典』(2008 年)などがある。

*2『太平洋戦争と慶應義塾』(1999 年)、『証言太平洋戦争下の慶應義塾』(2003 年)、『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿』(2007 年)ほか。

*3『文明論之概略』(1936 年:岩波文庫)、『福澤文選』(1937 年:義塾副読本)、『福翁百話・百余話』(1941 年:改造文庫)の一部記述削除、『福澤選集』全 12 巻刊行計画(1942 年～)の頓挫などがその例。

*4 丸山真男「福澤に於ける秩序と人間」『三田新聞』(1943 年 11 月 25 日付)。

*5 小泉信三「徳富蘇峰氏の福澤先生評論について」(『小泉信三全集』21 巻所収)、高野静子『蘇峰とその時代』(1988 年)に詳しい。

*6 たとえば、大貫恵美子『学徒兵の精神誌』(2006 年)、早稲田大学大学史資料センター・慶應義塾福澤研究センター編『1943 年晩秋最後の早慶戦』(2008 年)など。なお後者につき白井厚研究会 OBG 会『創世』36、37 号(2008、9 年)も参照。

*7 防衛研修所戦史室編纂による戦史叢書などの断片的記述のほかでは、日吉台地下壕保存の会編『日吉台地

壕』(1993 年)、同『太平洋戦争と慶應義塾』(1997 年)、同『日吉・帝国海軍大地下壕』(2006 年)など。
*8『慶應義塾百年史』中巻後（1964 年）の記述の域を出ていない。
*9 センターへの塾内文書移管に関する規程は任意のため、必ずしも現存資料が網羅的に集積されていない。また、保存スペースが長年の課題となっている。
*10 慶應義塾機関誌『三田評論』などを通じて、2008 年より継続的に提供を呼びかけている。

投稿

久里浜通信学校歴史館を見学しました

山田譲

通信学校本館前の参加者

7 月 23 日に、海軍通信学校があった陸上自衛隊久里浜駐屯地の歴史館を見学してきました。参加者は 11 人で、ちょうど駐屯地 60 周年の見学ツアー実施中だったので往時の貴賓室なども見ることができました。しかしなんといっても私たちの目当ては歴史館のなかにある９２式特受信機改４の実物です。おそらくこれと同じ受信機が日吉の地下壕の電信室にズラリとすえつけられ、通信兵が２４時間体制で受信していたわけです。

横幅 67 センチだったので日吉の電信室 16.4 メートルの両壁にギッシリならべると 40 台置けますが実際はどうだったでしょうか。30 台だったとも言われています。おもしろいのは受信周波数をかえるための差し換えコイル 15 個入りの箱が付属していたことです。性能のほどはよくわかりませんが、説明書には「ゼロ式戦闘機にも比すべき世紀の名受信機」と書いてあり、わたしはちょっとどうかなとおもいました。実際は不良多発で改良に改良を重ねて、ようやくここまできたということのようです。

戦時中のモールス通信用電鍵とレシーバー

梅雨明けの暑い日でしたが、自衛隊の新人ラッパ手６人のラッパ吹奏も披露してもらいました。女性自衛官が多いのにもおどろきました。はじめて自衛隊基地のなかに足をふみいれ、なかなかおもしろい一日でした。

投稿

陸上自衛隊久里浜通信学校の歴史館を訪ねて

能勢義昭

先の大戦で内外各地の戦況や被害、また国民生活の様子などについてはいろいろなメディアを通じて、今までに眼にする機会がありました。しかしながら、重要なインフラの一つである、情報通信については脇役でしか扱われず、各地の戦場や後方で、何を使って如何に行われたかのか、ずっと知りたいと思っておりました。

特に、大戦の終盤でレイテ沖海戦や戦艦大和出撃戦で、決定的な日米格差があったと言われる情報通信については、旧日本海軍の装備状況や運営体制について、少しでも知識を得た

いと思い参加しました。
　通信学校が今回公開した歴史館には、当時の陸海軍が装備品として、実際に部隊運用していた機器及び同型器が集中展示されていた。現代の進化した情報通信機器とは別世界の様で、あたかも戦時下の時代にタイムスリップしたこのような錯覚に陥りました。ご案内頂いた三等陸佐の方の説明によると、展示機器のほとんどすべてが、当時の日本の先端技術の粋を集めたものと、伺いました。保存状態の良い機器では、手に取って実際に操作も出来ました。
　今回、見学の目的でもあった、旧海軍の艦船用に広く使われた「九二式特受信機・改４」は館の中央に設置されていた。静かに展示されているだけだったが、おそらく同型器がレイテにおいても大和においても、艦船内にあって本部との通信の命綱であり、それぞれの海戦で最後まで本部指令を受け続けたという。
　受信した電文は暗号化されたり、平文のままだったりしたが、ほとんど米軍側に傍受され、解読されていたようだ。海戦中の艦内の混乱や関係した将兵の絶望感など、如何なものだったのか、あれこれ思いながらしばらく感慨にふけった次第です。
　海軍通信学校は、戦時色が濃くなりつつあった昭和 14 年に近くの田浦から移り、海軍将兵の通信技術の習得や実施訓練の場として発足したが、暗号通信や電波兵器など通信技術の発展、また、戦時色の拡大により、実戦部隊からの教育の促成化要求があり、中途半端に修了させられた学生もいるようだ。
　歴史館の展示の中に、「海軍精神注入棒」なる棒が三本あったが、当時、この棒一つ一つが学生たちの「お仕置き用」として、教育訓練の過程で、威力を発揮したと聞いた。
　当時の教育は恐怖教育であり、個人のミスもグループでお仕置きだそうで３種類の棒もそれぞれ痛さが異なっていたそうです。構内の庭園には、当時の同級生たちが、記念植樹や顕彰碑を建てて、戦後にもその団結振りを表していました。
　今も操作可能な機器で使われた技術、厳しい教育で育まれた人間関係など何が大切かを教えられた気がします。

＊＊＊「日本無線史」第 10 巻「海軍無線史」より＊＊＊
　海軍で使用された受信機は、１５式１号、１５式２号、８９式短、９１式短、９２式短、９２式特、９７式短受信機。その中で多用されたのは９１式と９２式。「特」は短波、長波両用で９２式特受信機には改１、改２、改３、改４、１型改３、２型改４がある。なかでも多用されたのが改３、改４で、いずれも電源は直流２００ボルトまたは６ボルト。１型改３は交流１００ボルト。なお短波とは波長１０～１００ｍ（３～３０ＭＨｚ）。
　「連合艦隊中枢通信隊兵装標準」としては、受信所は「大型受信機２台、小型受信機４０台」、送信所は「短波送信機１６台、長波送信機２台、中波送信機３台」とされている。しかし実際の整備としては「東京日吉は受信施設主体、送信機は予備として短波２ｋｗ４台」と書かれている。受信機の台数は書かれていない。また「東京通信隊耐強受信所」（蟹ヶ谷受信所が該当）は兵装標準では受信機４０台とされているが、昭和１９年末の整備状況では「東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊」は「中波受信機２台、長波１台、短波１２台」であり、兵装標準とは相当ちがっている。

投稿

2010 年 7 月 3 日(土)上映

『フェンス』の女性たち

市川　公子

この映画の上映を企画してくれた林栄美子さんからの情報では「米海軍池子家族住宅（旧池

子弾薬庫）近くに住む人達のインタビューで３時間」ということでしたので、反対運動をしている人達の話を延々と聞かされるのかなあと消極的な気持ちで参加しました。

ところが実際には『フェンス』内から強制的に立ち退かされた人達の戦中・戦後史が語られたものでした。特に二人の女性の新しく移った土地での泣き言ではない逞しい今に至る歴史をイキイキと語るドキュメンタリーでした。「自分の手で家を守り、子どもたちを育ててきた」女性たちは亀岡さんの言う「風と共に去りぬ」のスカーレットオハラのようでした。タラの土ならぬ池子の土を握り「自分達の土地」を守る姿です！

なかには反対運動をしてきた人達、「米軍のオカゲで自然が残った」と言う人達のいろいろな証言もありました。しかし「思いやり予算」と称する我々の税金で米軍家族の光熱費まで賄っているのですから自分達で自然保護をしていると同じです。池子の動植物もこのままの状態では荒廃するという案内人の証言もありました。

この日吉も 1944 年連合艦隊司令部に慶應義塾の第１校舎・寄宿舎が「貸与」され地下壕も建設されました。その後 1945 年 9 月にはアメリカ軍に接収されました。又海軍省艦政本部地下壕建設のため箕輪の住民は強制移動させられるという池子と同じ歴史です。しかし 1949 年 10 月 1 日に日吉キャンパスは返還されました。

「米海軍池子家族住宅」も年一度開放され住民も入ることができます。その時アメリカ大好きでフォークダンスを脳天気に踊っている女性達と現在まで戦争を引きずって闘っている女性たちとの対比を映像はハッキリと示していました。

監督の藤原さんは若い方ですが視点が明確です。上映後の質疑応答その後の交流会で撮影時の話も伺い有意義な上映会でした。

地下壕ガイドから一言

長谷川　崇

6 月 28 日（月）本日の見学者はガイドになって初めての視力障害者と盲導犬（９歳）の案内となり、午後 2 時日吉駅前に集合し来往舎へと進み、木陰にて前段の解説を行うと同時に地下壕の説明図が予め点字にて作成された物が持参されました。見学者の内訳は、障害者３名（１名女性)、弱視者２名、晴眼者２名（１名女性）計７名です。

案内は基本的に言語的補足と、蝕察による見学方法によりスタートしました。第一校舎正面玄関ではコンクリートの壁、大きな石柱など十分な蝕察で感じていました。歩行には障害者１名と盲導犬と晴眼者１名が、女性には女性の晴眼者が、弱視者１名は私の肩を頼りに他の人は１人で地下壕に向かい途中の階段も無事に下りて入り口で内容説明後、通路を下り 40 センチの壁､ブロックの状態を言語の案内と合わせて感触を十分確かめて歩行を続け心配していた通路の溝等伝言により難なく歩けて安心しました。途中で男性の方から「暗いのは何でもないですよ」と明るく笑って居たのが印象的でした。盲導犬には右･ライト、左・レフト、止まれ・ストップ、留まれ・ステイ､と指示には直ぐに従う賢さを眼の辺りに見て改めて感心しました。途中長官室跡の壁の仕上がりの様子を探り違いを感じてもらいました。電信室では壁跡に残された、タテ６ｃｍ、ヨコ６ｃｍ、長さ８ｃｍの木のレンガを手に取って役目を感じてもらいました。見学後昇り階段を上がり通常は直進しますが

参加者及び参加犬

今回は右折をして第一校舎裏を回り東側にある校舎完成記念碑の台座左側に皇紀「2594」年右側に西暦「1934」年の刻字を蝕察して７６年前に完成された校舎を確認し、記念撮影をして喜んでいました。　見学後懇談会を行い無事に終了する事が出来ました。

点字民報８月号に見学会の内容が掲載される予定でどれだけうまく伝わったか楽しみな今日この頃です。

（追記）今回の見学者は点字民報「視覚障害者と家族のための月刊誌」８月号掲載の原稿資料編集者の皆様でした。

夏休み見学会点描

今年の夏は猛暑に襲われ見学会も太陽がジリジリ照らす下で行われました。見学者はもとよりガイドも熱中症に充分用心をしながらやりました。

夏休みは見学会の回数を５回増やし、多くの児童生徒・親子の参加者がありました。

右の新聞は８月10日に見学した小学校４年生の作品です。説明を一生懸命聞いて、勉強したことが伝わってきます。

下写真は日吉小学校６年生の見学会です。112 名が参加しました。

お知らせ

2009 年より『日吉台地はこんなに多様でおもしろい』というテーマで「日吉をガイドする講座」を行ってきました。

第 1 回は『日吉台地の成り立ち－自然地理の学問分野から－』(松原彰子慶應大学経済学部教授地理学)、第 2 回は『横浜と川崎の戦争遺跡にまなぶ』(新井揆博本会副会長)、第 3 回は『日吉台とその周辺の遺跡』(櫻井準也尚美大学教授考古学)と多岐にわたり、日吉台地を学んできました。今回は自然・環境の分野からマムシ谷を見てみたいと思います。マムシ谷を歩きながら、見過ごされた自然をもう一度見直しましょう。

第４回　日吉をガイドする講座

演題　「日吉の森の過去・現在・未来」

講師　岸　由二氏（慶應大学経済学部教授）

日時　2010 年 11 月 6 日(土)　9 時 30 分～12 時 30 分

会場　慶應義塾日吉キャンパス　藤山記念館

日吉は森の展示場。慶應義塾日吉キャンパスは、多様で広大な樹林の広がるキャンパスです。競技場東斜面の見事な照葉樹林、理工学部への階段脇の谷を覆う巨木の森。そして奥行き 500mをこえるマムシ谷の斜面を覆う雑木林、スギ・ヒノキ林。記念館脇の一の谷頂点見渡せば、まるで関東山地のようなその広がりに、賑わいあふれる生きものたちの暮らしがあります。日吉の森は都市ど真中の生物多様性拠点なのです。しかしその森は、実は危機の緑でもあります。過去に数万本も植樹され、放置されてしまったスギ・ヒノキの立ち枯れが始まり、学生たちにも危機が生じました。一の谷や鬼の寝床は、ササやクズにおおわれ侵入不可能な藪となり、冬場、山火事が起これば大惨事となる状況もありました。森の展示場は、管理を放棄され、保水力も、生物多様性保全の力も失って荒れ果ててゆく、列島の危機の森のミニチュアでもあったのです。

ここ 10 年ほど、その危機を脱するための作業が、教員、学生、市民、そして高校・大学事務の手で進んでいます。針葉樹林の一部で大規模な伐開が進んでいます。鬼の寝床、まむし谷谷頭、一の谷では、スギ・ヒノキの除伐と雑木林の回復が進んでいます。回復の焦点、一の谷は、ドングリから育成されたクヌギがすでに 10m近くに生長し、まもなく見事な雑木林に変わってゆきます。谷からの湧水で創出された池は、絶滅危惧種ホトケドジョウを含む水生生物の保全地ともなりました。本年秋には、生物学教員他による多年にわたる自然調査を基礎とし、コンサルタントの手で「日吉地区・グリーン計画」がとりまとめられ、日吉の森の次世代管理を誘導する基礎資料となってゆくはず。危機の展示場から希望の森へ。いま日吉の森は、そんな未来をささえる教員、学生、職員、市民のさらなる登場を切望しています。2010 年 11 月 6 日。危機と希望の日吉の森をみんなで散策してみましょう。

第 5 回　日吉をガイドする講座

演題　「慶應義塾史における戦争」

講師　都倉武之氏　(慶應義塾福澤研究センター専任講師)

日時　2010 年 12 月 18 日(土)　13 時～15 時

会場　慶應義塾日吉キャンパス来往舎　大会議室

お知らせ

第１８回　横浜・川崎平和のための戦争展

○テーマ

《　本土決戦体制とわが郷土　》

――私の街から戦争が見える――

○主催・後援・実施団体

主　　催　　横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会
後　　援　　港北区（予定）
実施団体　　日吉台地下壕保存の会・蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会
　　旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会（略・登戸研究所保存の会）
代　表　　大西　　章　日吉台地下壕保存の会会長・慶應義塾高等学校教員
副代表　　新井　揆博　戦争遺跡全国ネットワーク運営委員（蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会代表・日吉台地下壕保存の会副会長）
　　姫田　光義　登戸研究所保存の会代表・中央大学名誉教授
　　渡辺　賢二　明治大学講師
顧　　問　　白井　　厚　慶應義塾大学名誉教授
　　須田輪太郎　国際人形劇連盟名誉会員

○開催日程　　**２０１０年１０月１６(土)、１７日(日)　１０時～１７時**
○会　　場　　**慶應義塾日吉キャンパス来往舎**　　事前申込不要　入場無料

○内　　容

○展示　イベントテラス（１階）　１０月１６日(土)～１７日(日)　１０時～１７時
　戦争遺跡の写真・実物資料・東横沿線の空襲・市民の描いた戦争の記憶の絵他
○若者の発表　　大会議室（２階）１０月１７日(日)１０時～１２時
　高校生の研究発表
○シンポジウム　大会議室（同）　１０月１７日(日)１３時～１５時３０分
　「本土決戦体制とわが郷土」
　コーディネーター　山田　朗　明治大学教授
　パネリスト　愛澤伸雄　安房文化遺産フォーラム
　　新井揆博　日吉台地下壕保存の会
　　北原高子　松代大本営の保存をすすめる会

○関連行事　会報 98 号 p23 を参照のこと（予約が必要です）
①登戸研究所を中心とする見学会 10 月 2 日(土)　9：30~
②房総半島の戦跡巡りバスツアー10 月 31 日(日)　8 時~

○予約・連絡先　　亀岡敦子　　T&F　045－561－2758

一緒に参加しませんか

《秋に戦争遺跡をめぐる》　見学会へのお誘い

今年の戦争遺跡めぐりの旅は、今春開館したばかりの「明治大学平和教育登戸研究所資料館」と、神奈川県とは軍事的に密接な関係のある、千葉県房総半島の戦争遺跡の見学を企画しました。１０月１６、１７日に行われる「第１８回横浜・川崎平和のための戦争展」のテーマである「本土決戦体制」を、実地にみる旅でもあり、詳しい案内がつきます。多くの皆様の参加を、お待ちしております。

（１）「明治大学平和教育登戸研究所資料館」と大学構内に残る戦争遺跡　見学会

日時　　２０１０年１０月２日（土）　９時３０分～１２時
場所　　明治大学生田キャンパス
集合場所　小田急線生田駅改札前
集合時間　９時３０分
案内　　登戸研究所保存の会
参加費　　３００円（資料代　　資料館は入場無料）

☆午後から**生田緑地の戦争遺跡見学会**を行います。希望者のみ（健脚コースです）
☆　昼食は学食で摂ることができます
☆　参加申し込み　下記の方法で申し込んでください

（２）房総半島の戦争遺跡をめぐる　バスツアー

日時　　２０１０年１０月３１日（日）　８時～１９時（予定）
場所　　南房総市と館山市の戦争遺跡
　　特攻機「桜花」発射台跡・掩体壕・赤山地下壕・特攻基地など
募集人数　２７人（定員になりしだい締め切ります）
集合場所　慶應日吉キャンパス銀杏並木
集合時間　７時４５分（集まりしだい出発します）
案内　　現地の戦跡保存の会
参加費　　６千円　　交通費・資料代・保険料・昼食代・案内謝礼ほか

☆　車中、新井揆博さんによる「本土決戦体制」についての講義があります
☆　参加申し込み　葉書かファックスで亀岡まで申し込んでください
　（１）は９月２０日　（２）は 10 月 15 日　締切りです

募集中

☆　①参加希望者全員の氏名
　②代表の住所・電話番号・メールアドレス

申込み先　〒223-0064 横浜市港北区下田町 5－20－15　　亀岡敦子
　　Ｔ＆Ｆ　０４５－５６１－２７５８

☆あなたの戦争の記憶を「絵」にしてみませんか？☆

横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会は 2005 年から戦後 60 年の節目として、「戦争の記憶」の継承を展示の柱の一つとし、戦争を体験された皆さんからその体験を絵にして頂き展示してきました。体験画は、技術的な甲乙を超えた戦争・平和への熱いメッセージが一つ一つに感じられて、すばらしいものです。戦争を体験された皆さん、再び戦争を繰り返さないために、今のあなたの想いをご自分の絵に是非託してください。

絵画募集について

１、作品　戦争時の体験（心に残っている事、何でも結構です　オリジナル作品　）
２、用紙　Ａ３版サイズ（短い説明文を付けてください　画材は水彩・クレヨン等何でも）
３、〆切　10 月 10 日
４、絵画受付先：　法政大学第二高等学校育友会教育研究所
　〒211-0031　川崎市中原区木月大町６－１（tel044－711-4371）

☆ お寄せいただいた作品は、法政二高育友会教育研究所で厳重に保管させていただきます。なお、作品の一部を教育活動に利用させていただくこともありますのでご了承下さい。
（問い合わせ　亀岡敦子　tel045－561-2758）

☆活動の記録　　（2010 年 6 月～8 月）

6／16　運営委員会　会報 97 号発行（慶應高校物理教室）

6／19～21　第 14 回戦争遺跡保存全国シンポジウム南風原大会に参加
テーマ「ヒトからモノへ　戦争遺跡の保存・活用・次世代への継承を考える」
会場　沖縄県南風原町中央公民館ホール・南風原文化会館

6／25　地下壕見学会　旭化成ＯＢ会　47 名

6／26　2010 年度三田史学会　シンポジウム「キャンパスのなかの戦争遺跡―研究・教育資源としての日吉台地下壕」

6／28　地下壕見学会　「点字民報」取材　7 名（盲導犬も参加しました）

6／30　横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会（法政第二高校教育研究所）

7／1　地下壕見学会　福澤研究センター設置講座　5 名

7／3　映画『フェンス』上映会　来往舎シンポジウムスペース

7／5　学習会「わが街再発見　日吉台地下壕①」　日吉地区センター　26 名

7／10　地下壕ガイド学習会　（菊名フラット）

7／12　地下壕見学会「わが街再発見　②」日吉地区センター　26 名

7／14　横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会（法政第二高校教育研究所）

7／16　運営委員会　（慶應高校物理教室）

7／21　地下壕見学会　都筑区小学校社会化部会　14 名

7／23　久里浜通信学校歴史館見学　12 名

7／24　定例見学会　46 名

7／29　地下壕見学会　神奈川県民主医療機関連合会　15 名

7／30　地下壕見学会　慶應大学ヒヨシエイジ実行委員会　22 名

7／31　夏休み見学会　24 名

8／6　夏休み見学会　43 名

8／10　夏休み見学会　31 名

8／12　戦時の体験を聞き平和を語る集い（平和・健康フェスタ実行委員会主催・かながわ生協下田店）参加　書籍・資料展示など

8／18　学習会　平和のための戦争展に向けて　日吉地区センター

8／28　定例見学会　35 名

予定

9／6　運営委員会　会報 98 号発送（慶應高校物理教室）

☆☆９／２５　日吉フェスタ　（慶應大学ヒヨシエイジ実行委員会主催）
日吉キャンパス来往舎・銀杏並木・協生館　11：30～16：00
大学と地域が交流する楽しい企画です。保存の会は来往舎前で展示・書籍販売の予定です。（売店やパフォーマンスなど）定例見学会も行います。☆☆

☆定例見学会（第 4 土曜日　13:00～）
9／25・　10／23・　11／27・　12／11（第 2 土曜日）

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。
お問い合わせは見学会窓口まで　℡045-562-0443（喜田　午前・夜間）

連絡先（会計）亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15　℡ 045-561-2758
（見学会・その他）喜田美登里：横浜市港北区下田町 2-1-33　℡ 045-562-0443
ホームページ・アドレス：http://hiyoshidai-chikagou.net/

日吉台地下壕保存の会会報　　（年会費）一口千円以上
発行　日吉台地下壕保存の会　郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表　大西章　　（加入者名）日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会